

### 3. 京田辺市堀切古墳群の再検討（1）

田口 裕貴・岡田 大雄

#### 1. はじめに

堀切古墳群は、京田辺市薪堀切谷・里ノ内に位置する古墳時代後期の群集墳である<sup>(1)</sup>。市内西部の甘南備山山麓から北東方向にのびる東西2つの丘陵上、約0.4kmの範囲に、消滅したものを含め11基の古墳と10基の横穴墓が群集するという南山城地域でも特異な様相をもつ。今回、京都府教育委員会によっておこなわれた発掘調査（高橋1969。以下、1969年報告）の出土遺物について、京田辺市史編さん事業の一環で再調査をおこなった。調査は石棺を岡田大雄が、土器を田口裕貴が担当し、石棺の調査においては陰地祐輝（以上、博士前期課程）、小林楓、溝口泰久、湯浅美玖（以上、3回生）の協力を得た。（田口裕貴）

#### 2. 遺跡の立地

堀切古墳群は、京田辺市西部、甘南備山（標高221m）の北東裾に広がる丘陵上、標高50～80mのあたりに位置する。なお、遺跡の立地については本書第Ⅲ部第1章の地理・歴史的環境および図2を参考にされたい。遺跡も含めた周辺の地形は、現在では学校や住宅地として改変されているが、開発前の地形図からは字名が示すように南北に谷が形成されており、遺跡はその谷をはさむ東西の斜面に分布していたことがわかる。

さて、古墳時代の京田辺市内では古墳が集中的に造営される地域が時期によって異なることがわかっている（和田2018）。まず、前期には市内東部の飯岡地域に飯岡車塚古墳やゴロゴロ山古墳などの中小首長墳がつけられ、中部の興戸地域では小円墳を中心とする興戸古墳群がみられる。中期になり、木津川右岸で久津川古墳群が造営される頃には、京田辺市内の古墳は北部の大住地域へ中心を移し、大住車塚古墳や大住南塚古墳がつけられる。さらに後期、とくに6世紀中葉以降には、各地の丘陵上に横穴式石室墳が築造されるようになり、後期末から終末期にかけては飯岡・松井・堀切地域で横穴墓がみられる。堀切古墳群周辺には、北約1kmに郷土塚古墳群や畑山古墳群などの群集墳、東側の丘陵頂部には天理山古墳群がある。そのうち、古墳時代前・中期に位置づけられる郷土塚2・3号墳および天理山古墳群を除く多くの古墳は、後期の横穴式石室墳である。なかでも、郷土塚4号墳では鍛冶道具、畑山2号墳では凝灰岩製の石棺片、畑山3号墳では銅鏡が出土している（鈴木ほか編2010）。

また、周辺には縄文時代から近世までの複合遺跡である薪遺跡がある。4基の埋没古墳が確認され、うち2基については堀切古墳群と近い時期に位置づけられている。7世紀後半以降には古墳を破壊して集落が営まれ、銚帯金具や円面硯が出土している（増田2008）。（岡田大雄）

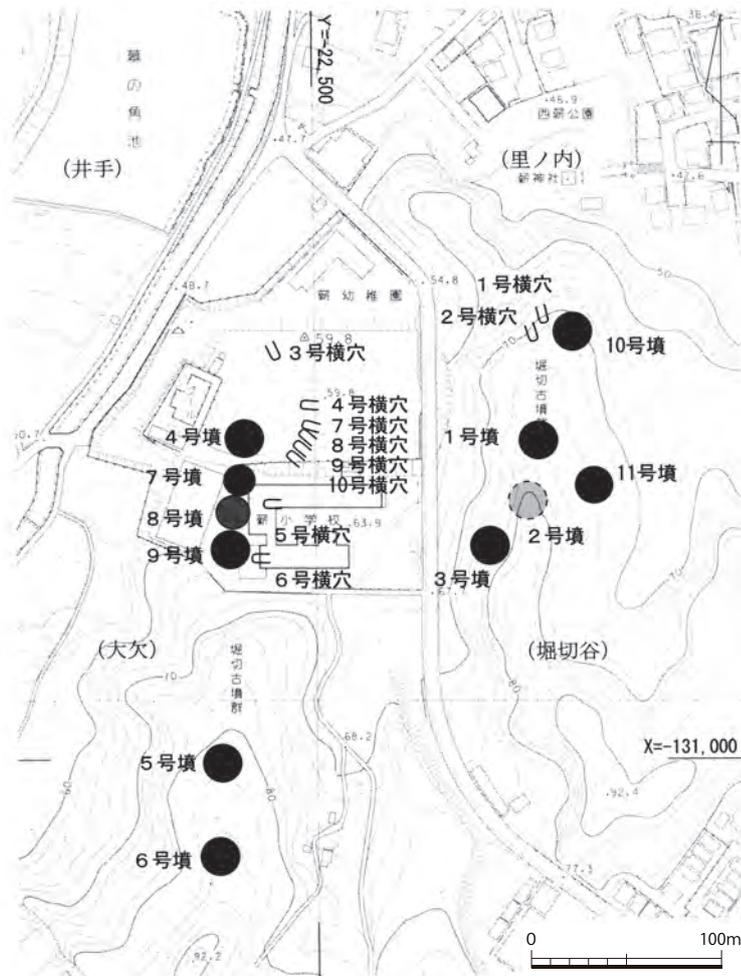


図1 堀切古墳群遺構分布図 (S=1/4000) (鈴木ほか編 2010)

### 3. 既往の調査

#### (1) 既往調査の概要

堀切古墳群の存在の把握は、1955年の田辺郷土史会による調査にさかのぼる。『田辺町郷土史 古代篇』からは、現地踏査や周辺での聞き取り調査により、当時すでに消失したものを含めて6基の古墳からなる古墳群であると認識されていることがわかる(村田編 1959)。続く1969年には土取り作業中の崖面から5・6号横穴墓が発見され、この時京都府教育委員会による調査がおこなわれている。その後も田辺町教育委員会(西川ほか 1989)、京田辺市教育委員会(島軒編 2006、鈴木ほか編 2010)により、小学校の建設や宅地造成といった開発に伴う発掘調査がおこなわれ現在に至る。堀切古墳群の位置する東西2つの丘陵のうち、西側丘陵部の古墳・横穴墓は未調査の6号墳を除き、現在では消滅している。

#### (2) 1969年報告の概要

1969年の京都府教育委員会による調査は、竹林の土入れ用の土取り作業中の5・6号横穴墓の発見に端を発するものであった。この調査では、発見された2基を含め数基の横穴墓が存在することから「堀切横穴群」と名付けられ、堀切古墳群とともにその存在が認知されるようになった。1969年報告では5・6号横穴墓以外の1～4号・7～9号横穴墓についても触れ

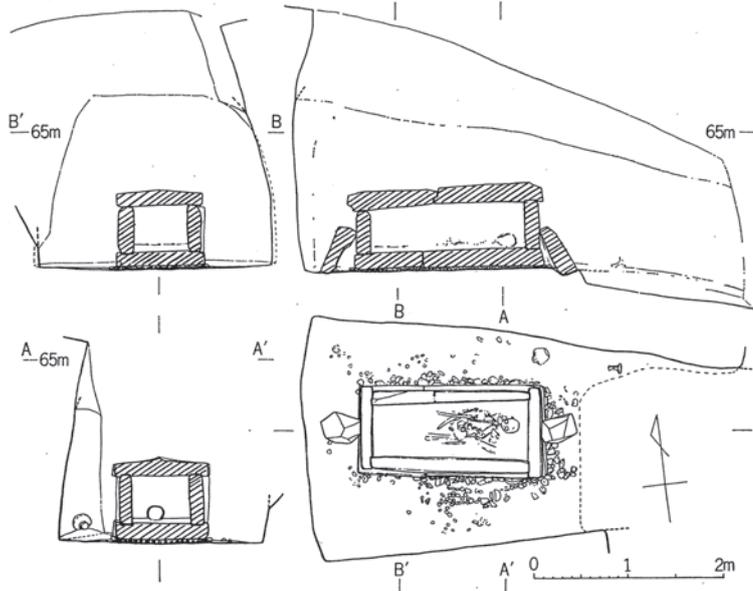


図2 堀切6号横穴墓実測図 (S=1/80) (高橋 1969)



写真1 堀切6号横穴墓検出状況 (林正氏提供)



写真2 堀切6号横穴墓出土石棺の保管状況

られており、当時1～3号横穴墓がすでに消失しているものとされている。また、1～4号横穴墓および6号横穴墓ではこの調査以前に須恵器を中心とした遺物の出土があったとされているが、その所在は現在も不明である。

1969年の調査時には、4～6号横穴墓について横穴墓の形態が確認されている。4号横穴墓は東向きの崖の中腹に幅・高さともに約2.0m、奥行約1.5mの穴が残っていたとされる。5号横穴墓は土取りの削平により奥壁の一部と北側の側壁が残っていただけだったが、残存長4.6m、残存高0.8m、奥壁付近の幅が2.0m程度とされている。また、横穴墓の構造は、玄室と羨道の明確な区別のないとっくり形の平面プランと、かまぼこ形の天井がそれぞれ想定されている。6号横穴墓についても、5号横穴墓と同様に削平により残存状況が良いとはいえなかったが、とっくり形の平面プランとかまぼこ形の天井という横穴墓の構造が想定されている。

5号横穴墓からは須恵器と土師器が出土している。また、6号横穴墓内には組合式家形石棺が置かれており、棺内から1体分の人骨、耳環、刀子、棺外からは原位置を保った須恵器が出土したとされている(写真1)。この人骨は1969年報告では成年男子と推定されていたが、後の検討では骨盤にみられる特徴から女性のものであるとされている(池田1994)。以上が1969年報告の概要である。4～6号横穴墓の出土遺物の一部は、現在、京田辺市教育委員会

によって保管・展示されている。また、6号横穴墓出土の組合式家形石棺は1993年に京都府の指定文化財となっており、京田辺市立中央公民館の敷地内に移設の上、保管・展示されている（写真2）。

4～6号横穴墓の中でもとりわけ6号横穴墓は横穴墓から石棺が出土した数少ない事例の一つであり、棺内の人骨や副葬品、原位置を留める土器の出土と合わせて注目されるが、調査および報告から半世紀もの時間が経過して、当時の図面や写真といった資料の所在が不明になりつつある。そこで市史編さん事業の一環で、6号横穴墓出土の組合式家形石棺および土器について再調査をおこなった。（田口）

#### 4. 調査の成果

##### (1) 石棺

**現状** 石棺は現在、京田辺市立中央公民館裏庭に設けられた覆屋内に移設、保管されている。塵埃は堆積しているものの、覆屋によって風雨は防がれているため、風化は比較的少ない。出土時の石材の位置関係を維持して移設されており、覆屋の入口側に開口部側の面が向くように配置されている。蓋石は入口側のもを15cm程ずらし、内部がわずかに見えるようになっている。石棺の短側面に立てかけられた石材は出土時には床面に埋め込まれていたが、現在は下部まで露出して据えられている。また、蓋石同士との接合部には報告書の図面に記録されていない欠損があり、調査後にできたものとおもわれる。なお、石棺の部分名称と部材の面の呼称については図3に示した通りである。短側面に立てかけられた石材については覆屋入口側（開口部側）を支持石①、反対側（奥壁側）を支持石②と呼称する。

**調査の方法** 調査は現状の石棺を移動させずにおこなうことを基本とし、調査前には可能な限り表面の塵埃を除去した。記録にあたっては3種類の方法を用いた。まず、3次元計測をSfM/MVSと3Dスキャナーの2つの手法でおこなった。SfM/MVSにはAgisoft社のMetashapeを用いた。3DスキャナーにはArtec 3dを使用した。これらの計測でえた3次元モデルからオルソ画像を作成した（図4・6～8）。次に、このオルソ画像を参考に、実測をおこなった（図5）。また、観察から石材表面の加工痕跡が明白かつ、特徴的な部分を選択して、

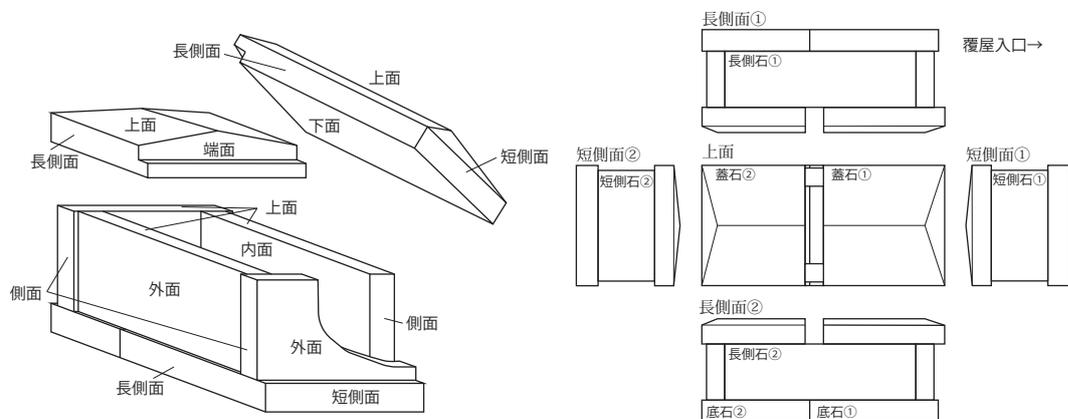


図3 石棺の各部名称

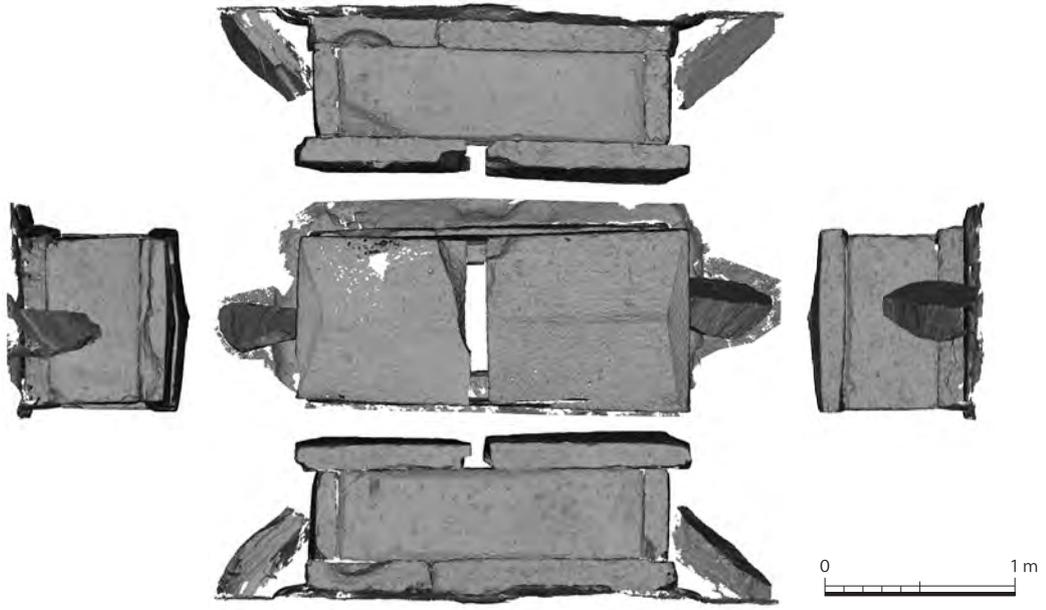


図4 石棺オルソ画像（3D スキャナーの計測データから作成、S=1/40）

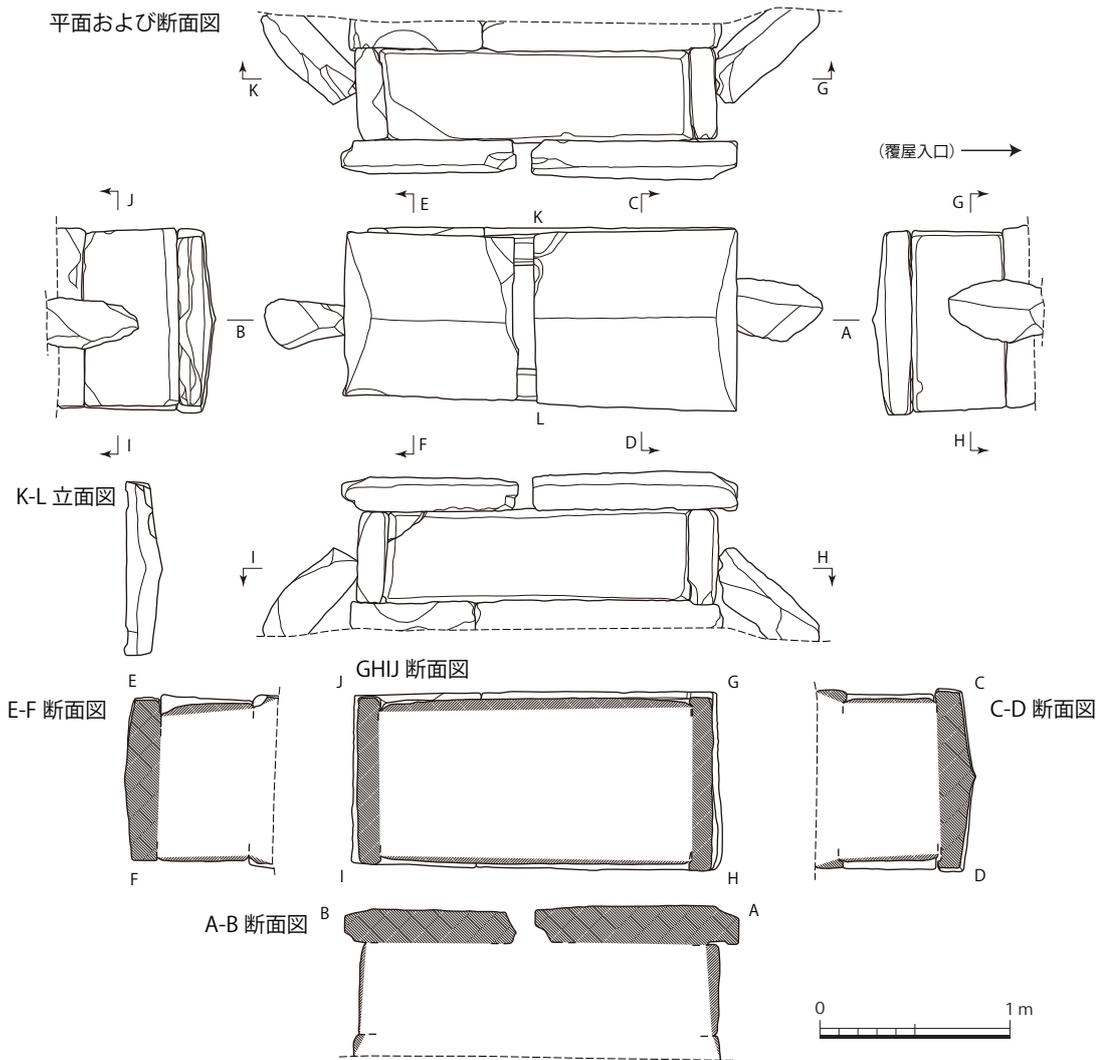


図5 石棺実測図（S=1/40）

拓本による記録もおこなった（図6～8）。

**調査の成果** 当棺は頂部に平坦面を持たない組合式家形石棺であり、規模は、全長が190～200cm、幅が85～97cm、高さ82～85cmで、蓋部が入口側に向かって広くなる。短側石が長側石を挟み込むように組み合わせられており、蓋石と底石は2つに分かれる。また、両側の短側面には短側石を支えるように支持石①・②が立てかけられる。

蓋石①と②は形状に差がみられる。蓋石①には頂部の稜が明確につくり出されるが、蓋石②の稜の表現は弱く、丸みを帯びる。幅や厚みは、蓋石②が一定であるのに対し、蓋石①は奥に向かって石材は狭く、かつ薄くなっており、蓋石②に合わせるように加工されていることがうかがわれる。さらに、蓋石①の下面にみられる側石をはめ込むための溝が蓋石②には明確に認められないという違いもある。蓋石同士の接合面には互い違いに組み合わせるように段が設けられていたようであるが、欠損が大きく、当初の様子は一部にしか残っていない。蓋石②は接合面とは反対の短側面にも同様の段を設けようとしたとおもわれる凹凸が存在する。

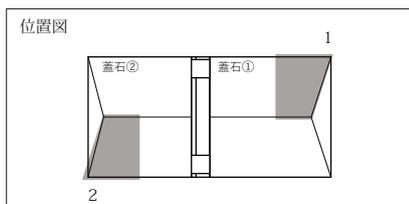
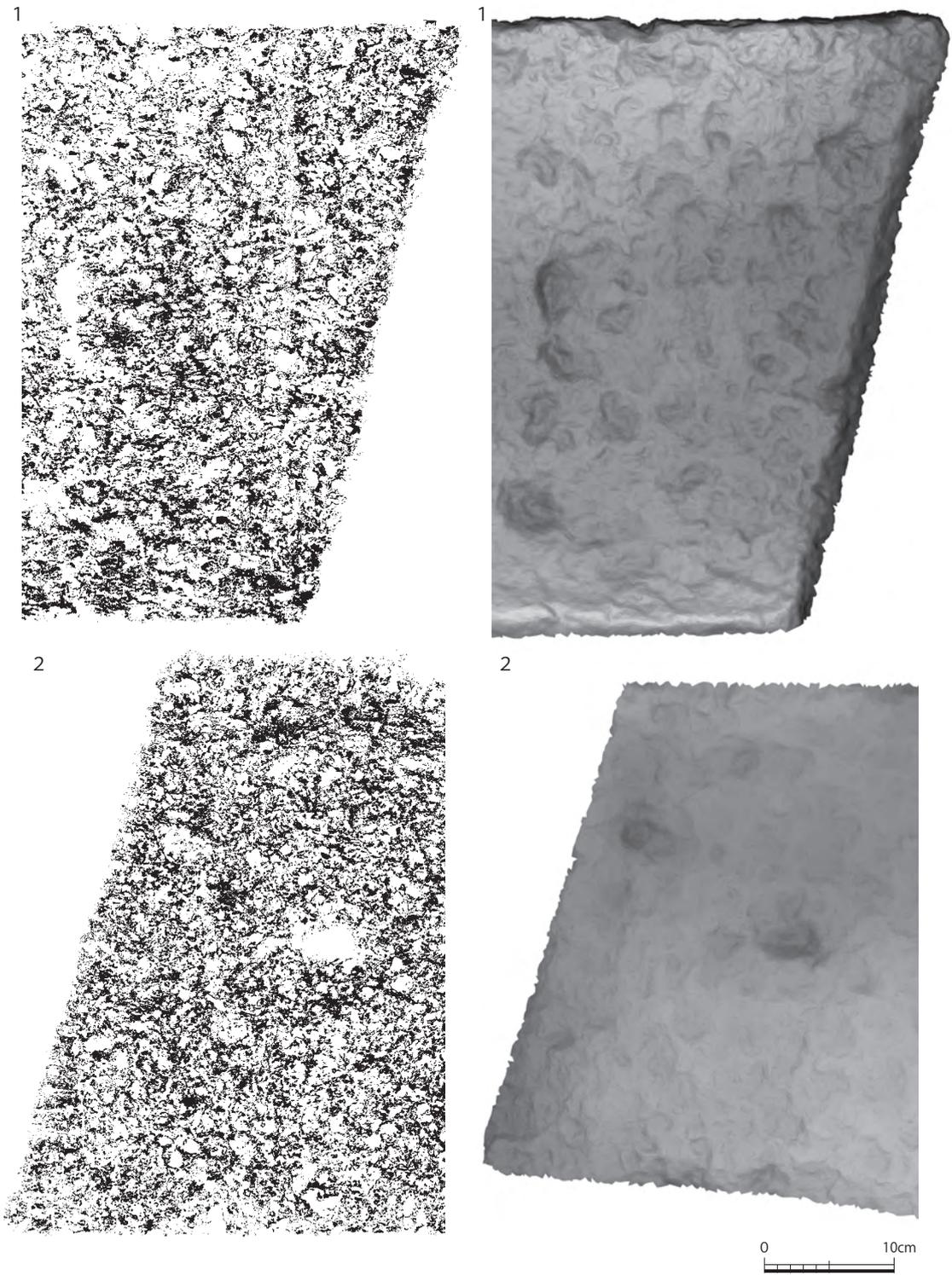
側石は長側石、短側石でそれぞれ規模が共通しており、規格性がうかがわれる。短側石には長側石をはめ込むための溝が長側石の形状に合わせて彫りこまれる。また、長側石①の上面には蓋石②に合わせて2cmほどの段がつけられている。なお、長側石は上面と内外面の稜が落とされた形状をしているが、長側石①では内面側がより緩く、丸みを帯びるのに対して、長側石②は外面側にその特徴がみられる。短側石の溝の形状から長側石①は出土時の位置を留めているのは確かであるが、長側石②は内外が反転している可能性もある。

底石は蓋石同様に2枚からなるが、幅や厚みは底石①、②ともにそろっている。上面には短側面側に短側石を載せるための段、長側面側に長側石をはめ込むための溝がつけられている。底石の側面や端面は他の石材の各面に比べて非常に粗く加工されている。

石材の表面には加工痕跡が観察された（図6～8）。いずれも、石の凹凸を打ち消すために工具で敲打した痕跡とおもわれ、大きく3種類に分けられる。一つは、平面が円形、断面がすり鉢状を呈するもので、連続して広い範囲に分布する。もう一つは、平面が細長いレンズ状もしくは方形状で、列をなすように連続して分布するものである。加えて、これらと比べて分布する範囲は狭いが、断面が匙面状で、間隔を開けずに連続するものもみられた。本稿ではこれらの痕跡を順にA、B、C類と仮称する。A類は蓋石上面や側石外面などの各部材の比較的広い面に多く確認される。詳細な記録はなしであったものの、棺内側を構成する面にも同様の痕跡がみられた。B類は蓋石端面や接合面、側石側面などの比較的狭く、細長い面に分布している。C類は溝部などのごく限られた範囲にのみ存在しており、A、B類のような石材の面ごとの偏りはみられない。C類については、石材同士の擦れ痕やA、B類の多少変形したものの可能性もあり、独立して一つの加工痕跡として扱うべきか否かは検討の余地がある。各部材の規模やそこにみられる加工痕跡の種類は表1に示した通りである。

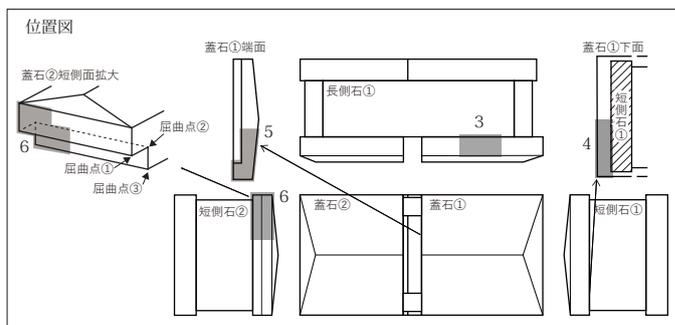
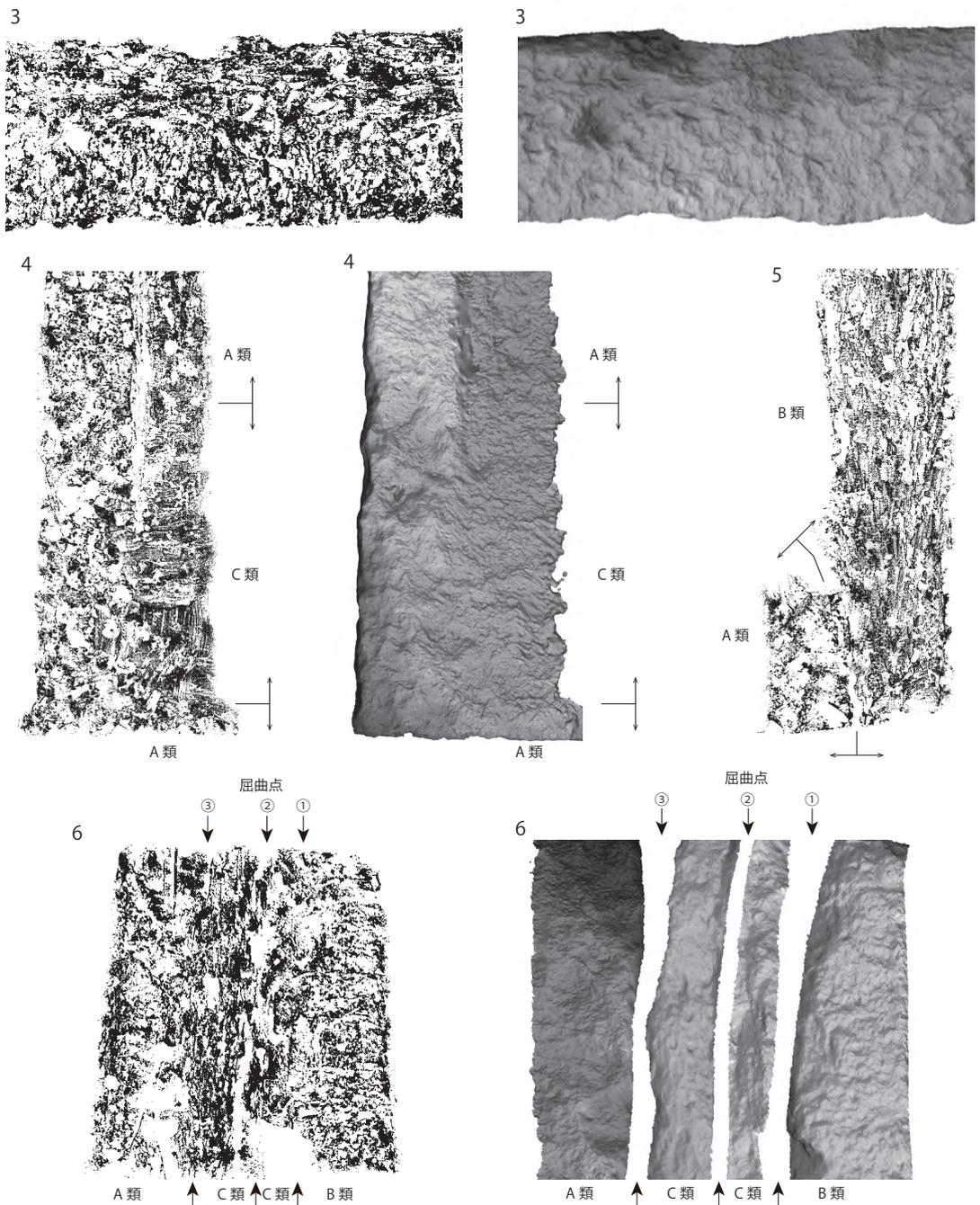
なお、使用されている石材について、石棺には姫路酸性岩類溶結凝灰岩（非溶結、異質岩片混じる）、いわゆる竜山石が使用され、支持石①、②には頁岩ないしは粘板岩、ホルンフェルスが使用されている可能性がある<sup>(2)</sup>。

**小結** 石棺の再調査の成果としては大きく二つ挙げられる。まず、各石材の形態が詳細に把握されたことである。従来いわれてきたように蓋石においては奥へ狭くなっていく傾向がある



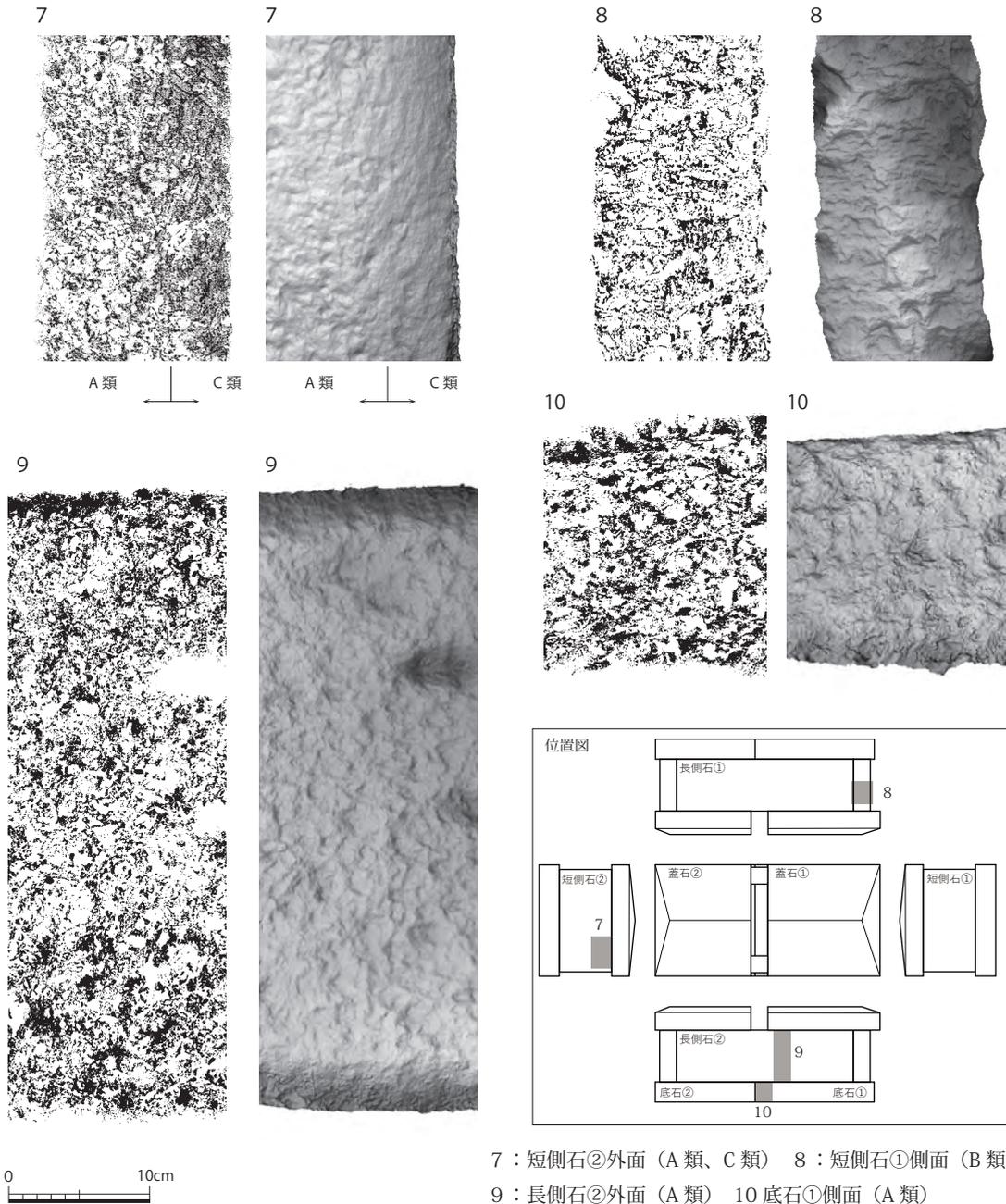
- 1 : 蓋石①上面 (A類、頂部付近のみB類)
- 2 : 蓋石②上面 (A類、頂部付近のみB類)

図6 石材の加工痕跡(1) (オルソ画像は SfM/MVS を用いて作成、S=1/5)



- 3：蓋石①長側面 (B類)
- 4：蓋石①下面 (A類、一部C類)
- 5：蓋石①端面 (B類、一部A類)
- 6：蓋石②短側面 (A類、B類、C類)

図7 石材の加工痕跡 (2) (オルソ画像は SfM/MVS を用いて作成、S=1/5)



7：短側石②外面（A類、C類） 8：短側石①側面（B類）  
 9：長側石②外面（A類） 10 底石①側面（A類）

図8 石材の加工痕跡（3）（オルソ画像は SfM/MVS を用いて作成、S=1/5）

一方で、側石は規格的につくられている可能性があることがわかった。また、加工痕跡についてはどの部分でも良好に観察することができ、AからCの3種類に分類した。古墳時代の石材加工技術について大系的な研究をおこなった和田晴吾（2015）の分類と比較すると、A類は「ノミ叩き」あるいは「ノミ小叩き」技法、B類は「チョウナ叩き」技法による痕跡と対応すると考えられる<sup>(3)</sup>。さらに、堀切6号横穴墓出土石棺ではそれぞれの技法が石材の面ごとに使い分けられている傾向もみられた。（岡田）

表1 各部材の規模と加工痕跡

部材名	規模（長軸長×中軸長×短軸長、cm）	加工痕跡（観察可能範囲のみ）
蓋石①	160×90～97×19	上面：A類、頂部付近のみB類／下面：A・C類？ 側面・端面：B類
蓋石②	91×86×17	上面：A類、頂部付近のみB類／長側面・端面：B類 短側面：A・B・C類
長側石①	161×50×17	外面：A類／上面：B類？／内面：A類？
長側石②	162×49×17	外面：A類／上面：不明／内面：A類？
短側石①	90～94×50×14	外面：A類／側面：B類
短側石②	90～94×49×15	外面：A類、上半の一部のみC類／側面：B類
底石①	123～125×93～95×15～	側面：A類／内面：A類？
底石②	65×87～93×15～	側面：A類／内面：A類？
支持石①	23×34×70	なし
支持石②	24×27×65	なし

## (2) 土器

1969年報告では、堀切4～6号横穴墓よりそれぞれ遺物の出土・採集を確認している。これらの遺物には、「田辺町薪堀切〇号横穴」「1969.1」といった注記がみられることから、既往の報告との照合が可能である。ここでは、1969年報告にみられる堀切横穴墓群出土の土器に加え、同遺跡において調査とは別の機会に採集されたものとして保管されている遺物についても紹介する。また、本稿で使用する須恵器編年は、6世紀については田辺昭三氏による陶邑古窯跡群出土資料を基にした編年（田辺1966・1981）を用いる。7世紀、TK209型式併行期以降の須恵器については西弘海氏以来の飛鳥・藤原宮地域出土資料を基にした編年（西1978、西口1999、菱田2011、深澤2002）を用いる。

4号横穴墓採集土器（図9-1） 4号横穴墓からは、「須恵器1点と刀が1本出土したと伝えられている」と報告されており、当該調査以前に遺物が確認されていたことがうかがえる。ここで紹介する須恵器杯身は、1969年の調査と近い時期に4号横穴墓内で採集されたものである。内外面ともに回転ナデを施している。やや長い立ち上がりが内傾しており、口縁端部は丸く収める。底部が欠損しているため、有蓋高杯の杯部である可能性も想定しておきたい。

5号横穴墓出土土器（図9-2～4） 5号横穴墓からは須恵器と土師器が出土している。これらの土器は土取り作業中に人骨とともに出土したものとされている。発見時の状況については、当時の地主である吉村巖氏の証言などから、「遺体は入口の方（東側）に頭部を向け、副葬品などは頭部のまわりに須恵器の杯身2個を上向けに、土師器杯を伏せて置いてあった」とされる。

2・3は須恵器杯身である。2は器形の焼き歪みが著しい個体である。底部外面はヘラキリ不調整であり、ロクロからの切り離し時の段が明瞭に残る。内面は回転ナデに加え、底部中央に静止ナデを施す。立ち上がりは非常に短く、内傾の角度も大きい。底部外面全体に降灰しており、須恵器小片の熔着がみられる。3は2と比べて扁平なプロポーションをもつ。底部外面はヘラキリ不調整であり、内面には回転ナデを施す。受け部から内面にかけての部分と外面での色調の違いから、蓋を被せて重ね焼きされたものと考えられる。底部外面全体に降灰しており、受け部と底部の境界には自然釉がダメになった状態でみられる。

4は土師器碗である。胎土は非常に精良で、外面に一部剥落がみられる。内外面に暗文等の

調整の痕跡はみられない。底部外面には約1/3の範囲にわたって黒斑がみられる。

須恵器杯身の口径が10cm前後で底部外面がヘラキリ不調整であることから、飛鳥Ⅰ新段階～Ⅱの時期を想定したい。

6号横穴墓出土土器(図10) 6号横穴墓出土の土器には、横穴墓内で石棺外から出土したもの(5～8)と竹林の土取り作業中に出土したもの(9～12)がある。横穴墓内での出土状況については、1969年報告の実測図および出土状況を撮影した写真から、石棺の北側面付近に短頸壺(8)、南側面付近に杯蓋(5)、やや羨道側に離れて北側壁寄りに有蓋高杯(6)がそれぞれ位置していた様子が復元できる。

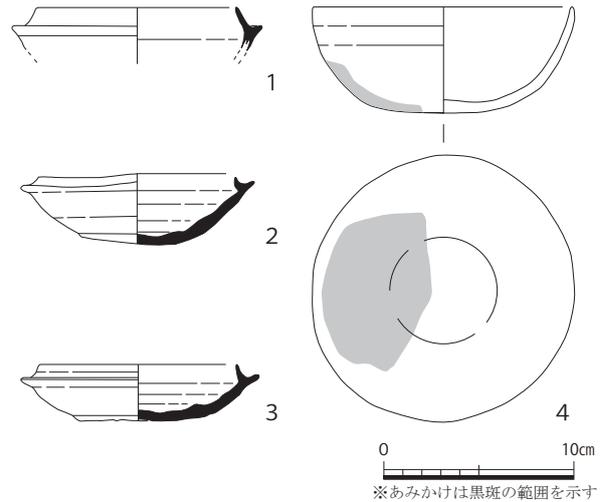


図9 4・5号横穴墓採集・出土土器(S=1/4)

5は杯蓋である。外面には回転ヘラケズリと回転ナデ、内面には回転ナデをそれぞれ施す。外面の肩部から天井部にかけて強い回転ナデ調整による内湾がみられる。外面には天井部から口縁部付近にかけて火面にさらされた痕跡が残る。比較的器壁が薄く、口縁端部を丸く収める。

6は有蓋高杯である。杯部は外面に回転ヘラケズリと回転ナデ、内面に回転ナデをそれぞれ施す。脚部の透かしは二段一方向であり、高杯の脚部としては珍しいものである。焼成は他器種と比べて非常に堅緻である。

7は高杯の脚端部片である。6号横穴墓出土の高杯はいずれも脚部が完形で残存していることから、別個体のものであることがわかる。

8は短頸壺<sup>(4)</sup>である。回転ナデによる調整を基本とし、外面底部にはやや粗雑な回転ヘラケズリを施す。頸部はやや外反して立ち上がり、口縁端部には平坦面を形成する。肩部の平坦面には3条の櫛描波状文がめぐり、その上下では沈線が2本ずつ全周する。櫛描波状文は全周する中で間隔が狭いものが途中から広いものへと変化している。

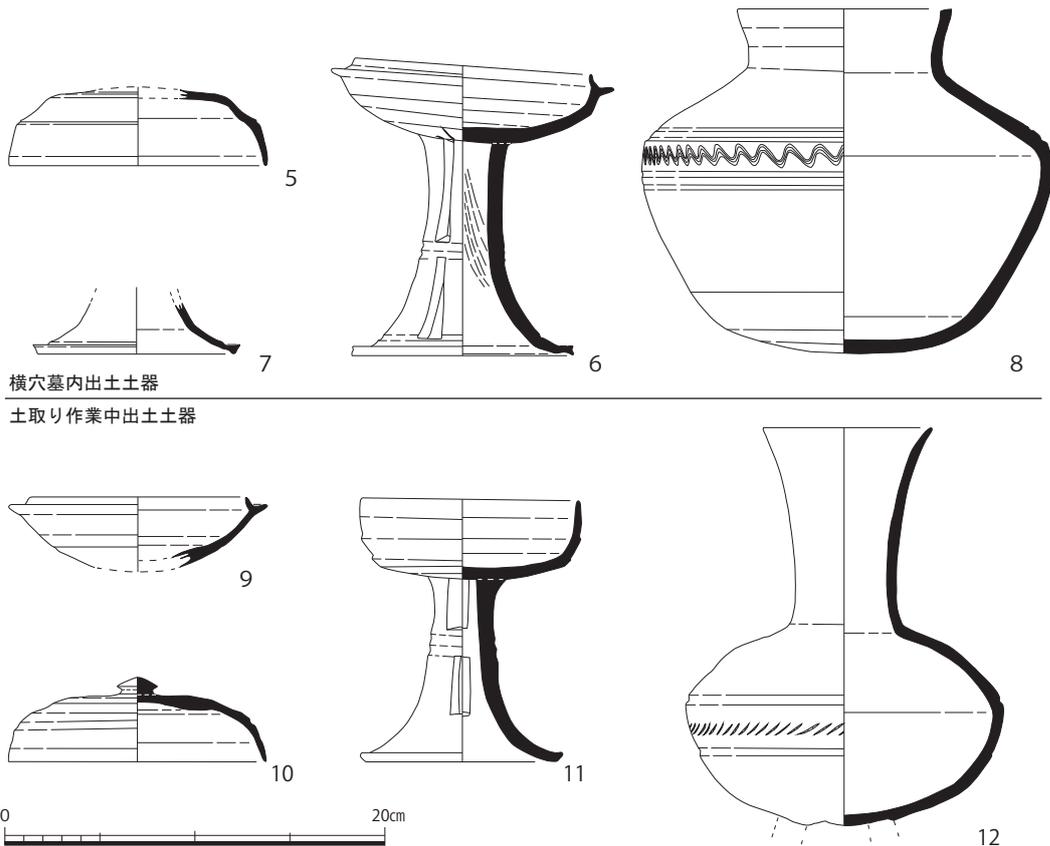
9は杯身である。底部外面の調整方法は欠損のために判然としない。内面には回転ナデを施す。立ち上がりは短く内傾しており、口縁端部は丸く収める。

10は有蓋高杯の蓋である。外面には回転ヘラケズリと回転ナデ、内面には回転ナデと中央部のやや広い範囲に静止ナデをそれぞれ施す。天井部外面の中央には宝珠つまみをナデ調整により貼り付け、口縁端部は丸く収める。6の有蓋高杯と同様に堅緻な焼成をみせる。

11は無蓋高杯である。杯部外面の段は鋭さに欠ける。脚部には二段二方向の透かしをもつ。共伴する他器種に対して焼成が甘く、色調は灰白色を呈する。

12は脚付長頸壺である。脚部が欠損し壺部のみが残存しているが、底部外面に残る穿孔の痕跡から3方向に透かしをもつことがわかる。肩部全面に降灰と焼き膨れがみられる。口頸部は中位までほぼ直立し、口縁端部に向けて大きく外反して立ち上がる。肩部と胴部にはそれぞれ段を形成し、その間に列点文が全周する。

時期については、杯蓋の口径が14cm弱で天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施しており、



横穴墓内出土土器  
土取り作業中出土土器

図10 6号横穴墓出土土器 (S=1/4)

無蓋高杯の脚部透かしが二段二方向であることから、陶邑編年のTK209型式併行期もしくは飛鳥I古段階に位置づけられる。

堀切古墳群採集土器(図11) これらの1969年報告において提示されていた遺物に加え、付近で採集されたとみられる杯身が京田辺市教育委員会に保管・展示されている。注記には「田辺町新堀切横穴付近採集1967」とあり、1969年の調査以前に発見されたものであることがうかがえる。1969年報告では、調査以前から横穴墓から須恵器の出土があったとされており、その一部であると考えられるが、具体的な採集位置が不明であるため、帰属する古墳ないし横穴墓は定かではない。底部外面はヘラキリ不調整であり、内面は回転ナデに加え、中央部に静止ナデを施す。立ち上がりは短く内傾している。底部外面がヘラキリ不調整であることや、形態的特徴は5号横穴墓出土の杯身(2・3)と似るが、色調や焼成・降灰の具合など異なる部分もみられる。飛鳥I新段階の時期に収まるものと考えられる。

堀切古墳群出土土器の検討 1969年報告では調査がおこなわれた2基の横穴墓のうち、6号横穴墓の遺物出土状況が図示されているに留まり、一部の遺物については出土位置が定かではない。また、調査以前に出土し、その所在が不明となっている遺物もあるとされており、1969年報告で挙げられた遺物が各横穴墓の性格のすべてを示しているとは言い難い。現状、当時の図面や写真といった調査に関連する資料との照合が困難ではあるが、今回の各出土遺物の再検討で得られた知見をもとに、他の既往の調査成果を合わせながら以下に若干の考察をおこなう。

表2 遺物観察表

報告番号	種類	器種	法量 (cm)			残存率	色調		胎土	焼成	1969年報告 対応番号	技法上の特徴	備考
			口径	底径	器高		外面	内面					
<b>4号横穴墓</b>													
1	須恵器	杯身	10.5 (推定)	—	2.3 (残存)	4分の1 (口縁)	灰	灰	密	良好	4-P1	内外面：回転ナデ	1969年調査に近い時期に横穴墓内において採集
<b>5号横穴墓</b>													
2	須恵器	杯身	9.9 (推定)	—	4.7	完形	灰赤	灰赤	密(Φ2~5mmの大形白色粒を含む)	良好	5-P2	底部外面：ヘラキリ未調整、底部内面中央に横ナデ、ロクロ回転方向：右	焼き歪みが著しい。底部外面に付着物あり。
3	須恵器	杯身	10.5	—	3.0	完形	にぶい赤褐	紫灰	密(Φ0.1~7mmの白色粒を含む)	良好	5-P3	底部外面：ヘラキリ未調整か、底部中央内面に横ナデか、ロクロ回転方向：右	重ね焼きによる焼成か(内外面の明確な色調の違いより)
4	土師器	杯	13.7	—	5.6	完形	橙	橙	密(Φ0.1mmの灰色粒を多く含む、また内外面に少量の雲母を含む)	良好	5-P1	底部外面に黒斑あり(色調：黒褐)	
<b>6号横穴墓</b>													
5	須恵器	杯蓋	13.6	—	4.2 (推定)	2分の1 (口縁)	灰オリーブ	灰	密(Φ0.5mmの白色粒を含む)	良好	6-P1	天井部外面：回転ヘラケズリ	外面口縁部へ天井部に一部外面にさらされた痕跡あり
6	須恵器	有蓋高杯	12.5	11.6	15.8 (最大) 14.9 (最小)	12分の5 (口縁)	灰	灰	密(Φ1mmの白色粒を多く含む)	堅緻	6-P2	ロクロ回転方向：右	杯部に傾きあり、脚部透かし：二段一方向、脚部内面に絞り痕あり
7	須恵器	高杯脚端部	—	10.4 (推定)	2.7 (残存)	6分の1 (脚端部)	灰	灰オリーブ	密	良好	6-P4		
8	須恵器	短頸壺	11.2	—	18.2	4分の3 (口縁)	オリーブ黒	オリーブ黒	密(Φ1mmの白色粒を含む)	良好	6-P3	底部外面：回転ヘラケズリ、ロクロ回転方向：右	口縁端部に平坦面を形成する。肩部を柳葉波状文が全周する
9	須恵器	杯身	10.7	—	3.9 (推定)	4分の1 (口縁)	灰	灰	密(Φ0.5mmの白色粒を含む)	良好	6-P5	底部外面：回転ヘラケズリか	
10	須恵器	有蓋高杯蓋	13.6	—	4.5	完形	灰	灰	密(Φ1mmの白色粒を多く含む)	堅緻	6-P7	ロクロ回転方向：右	
11	須恵器	無蓋高杯	11.5	10.2	14.0 (最大) 13.8 (最小)	完形	灰白	灰白	密(器壁全体にΦ0.1mmの黒色粒を含み、杯部にΦ1mmの白色粒を含む)	軟質	6-P8	ロクロ回転方向：右	杯部に傾きあり、脚部透かし：二段二方向
12	須恵器	脚付長頸壺	8.9	—	21.1 (残存)	12分の5 (口縁)	オリーブ黒	オリーブ黒	密(Φ1~5mmの白色粒を含む)	良好	6-P6		底部中央を列点文が全周する。脚部全体を欠損するが、穿孔の痕跡から三方向透かしと推定できる。
<b>堀切古墳群採集遺物</b>													
13	須恵器	杯身	11.4	—	4.1	完形	灰白	灰白	密(外面に黒色溶解粒みられる)	やや軟質	—	底部外面：ヘラキリ未調整	1967年採集

まず、1969年報告に記載されている5号横穴墓の遺物出土状況について考えたい。先述した通り、5号横穴墓出土の須恵器杯身2点と土師器碗1点は、遺体の頭部の周辺に置いてあったという証言が得られている。また、須恵器杯身は上向きに、土師器碗は伏せた状態であったともされている。図面や写真といった当時の記録が公表されておらず、1969年報告に記述される「遺体」の状況についても不明であるため確定はできないが、このような出土状況の記述からは、遺体に近接して土器を副葬していた状況の他、遺体の頭部を乗せる枕として2点の須恵器杯身を転用していた状況を想定することが可能であろう。

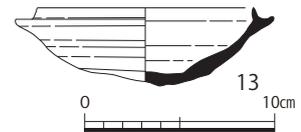


図11 1967年採集土器 (S=1/4)

また、6号横穴墓からは横穴墓内から杯蓋、有蓋高杯、不明高杯、短頸壺、土取り作業中に杯身、有蓋高杯蓋、無蓋高杯、脚付長頸壺が出土している。仮に土取り作業中出土の土器の帰属をすべて6号横穴墓に求めるならば、確認されているものでそれぞれ器種の異なる8点の土器が副葬されていたことになる。堀切古墳群は1978・1979年に4・7～10号横穴墓が発掘調査されており、杯身などの単一器種の数量で勝る横穴墓はみられるものの、複数種類の高杯類と壺類をもつなど、横穴墓群内で6号横穴墓にのみみられる特徴が存在することを挙げておきたい。

加えて、これらの横穴墓と同一地点に造営される各古墳からも副葬土器とみられる土器群が出土しているが、複数回の埋葬が想定される1号墳を除けば蓋杯・杯身を中心とした数・種類ともに少数のものがほとんどである。それらと比べても、6号横穴墓の副葬土器の組成にみられる器種の多様性は決して見劣りするものではないといえる。(田口)



ない。同一墓域内に異なる墳墓形態が混在する背景については詳細な検討が求められるが、本稿では遺跡名の煩雑化を防ぐために、この遺跡を古墳と横穴墓からなる群集墳であると認識し、同様の群構成をみせる奈良県天理市龍王山古墳群などの例に倣い、「堀切古墳群」と呼ぶこととする。

- (2) 橋本清一氏のご教示による。
- (3) 和田晴吾は石材加工の段階を、山取り、粗作り、仕上げに分けた上で、仕上げの段階でみられるものとして以下の技法を挙げる。主に硬質石材を対象に、使用先端が尖った工具で細かく叩く「ノミ小叩き技法」、軟質石材を対象として、刃のある工具で浅い匙面をなすように削る「チョウナ削り技法」、当初は軟質石材、後には硬質石材に対して、刃のある工具によって敲打する「チョウナ叩き技法」の3つである。なお、これらを終えた上に施す「みがき技法」の存在も指摘されている。
- (4) 1969年報告では広口壺と記載されているが、その形態的特徴から本稿では短頸壺として報告する。

#### 参考文献

- 池田次郎 1994 「法貴B 1号墳および堀切6号横穴の改葬人骨と近畿におけるその類例」『橿原考古学研究所論集』第12 吉川弘文館
- 島軒満編 2006『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ—薪切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—』(京田辺市埋蔵文化財調査報告書第36集) 京田辺市教育委員会
- 鈴木啓史・島軒満編 2010『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲ—薪切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ—』(京田辺市埋蔵文化財調査報告書第37集) 京田辺市教育委員会
- 高橋美久二 1969 「堀切横穴群発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 西弘海 1978 「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- 西川滋・林正・吉村正親編 1989 『堀切古墳群発掘調査報告書』(田辺町埋蔵文化財調査報告書第11集) 田辺町教育委員会
- 西口壽生 1999 「飛鳥地域の再開発直前の土器」『奈良文化財研究所年報』1999—Ⅱ 奈良国立文化財研究所
- 菱田哲郎 2011 「後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学1』(古墳時代史の枠組み) 同成社
- 深澤芳樹 2002 「山田寺下層の土器について」『山田寺発掘調査報告』本文編 奈良文化財研究所
- 増田孝彦 2008 「薪遺跡第8次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第128冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 村田太平編 1959 『田辺町郷土史 古代篇』田辺郷土史会
- 和田晴吾 2015 「古代の石工技術の再整理」『古墳時代の生産と流通』吉川弘文館(初出:和田晴吾 1991 「石工技術」『古墳時代の研究5』(生産と流通Ⅱ) 雄山閣)
- 和田晴吾 2018 「南山城地域からの問題提起」『古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館(初出:1988 「南山城の古墳—その概要と現状—」『京都地域研究』4 立命館大学人文科学研究所)



写真3 堀切古墳群出土・採集土器